

<研究ノート>

A Study of English Words

1. Portmanteau Words

橋 本 貞 雄

1. はじめに

言語は「音声または文字を手段として、人の思想・感情・意志を表現・伝達し、また理解する行為。またその記号体系」⁽¹⁾である。その構成要素は音声・語彙・文法の3つの体系に分けることができる。この3つの体系は通時的 (diachronic) に絶えず変化を続けている。就中、語彙体系の構成単位である語の変化はその時代の共時的 (synchronic) な変化を反映している。人間が造り出す抽象・具象の概念、物的生産物も含めて人間活動の大部分は語という形式で表現されるからである。

この語についての定義であるが、文法体系における文の定義に似て、容易に見えて実はむずかしいのである。本論では、「究極の独立した意味単位」⁽²⁾ という定義に従うことにする。

この意味単位である語の形成は、①創造、②複合、③派生、④その他の方法で行われる。

第2の複合は、独立した2語以上が結合して、1語を造る語形成である。複合は更に①直接結合、②一部消失結合に大別される。本論では、②の一部消失結合形態の1つである混成語 (blend) の例を辞書から抽出し、類似形態である混種語・混淆語・頭字語・略語との比較検討を行うことにする。

Ⅱ. 混成語と類似語の形態検討

混成語 (blend) はかばん語 (portmanteau word) と呼ばれることもある。Lewis Carroll が *Through the Looking-Glass* の中で用いた名称である。意図的に造られた

chortle < ch (uck) le + (sn) ort

snark < sn (ake) + (sh) ark

galumph < gal (lop) + (tri) umph

は、一般の辞書にも収録されている。

混成現象 (blending) は、Lewis Carroll 以前にも存在しているが、史的考察は本論では扱わない⁽³⁾。

混成語は、2語以上が結合し、一部を消失して新しい1語を造る語形成である。従って、独立した語が消失なく結合する一般複合とは異なる。

一般複合例

blackboard < black + board

loud-speaker < loud + speaker

fire station < fire + station

書記上1語で書かれたり、ハイフンで結合されたりあるいは分ち書きであったりしていても、「独立した意味単位」をもつ場合には複合語として扱う。

次に、派生による語形成であるが、接辞は独立した語ではなく、混成とは結合形式が異なっている。

impossible < (接頭辞) im- + possible

statement < state + (接尾辞) -ment

接辞の結合で語幹が発音・綴りにおいて変化することがあるが、可逆性をもった一時の消失であり、混成の消失とは本質的に異なっている。

次に混成の結合形態を検討することにする。第1図は上野景福『語形成』⁽⁴⁾の中に示されているものを一部拡張したものである。混成を複合の特殊なものとして、一般複合と対立させて分類している。

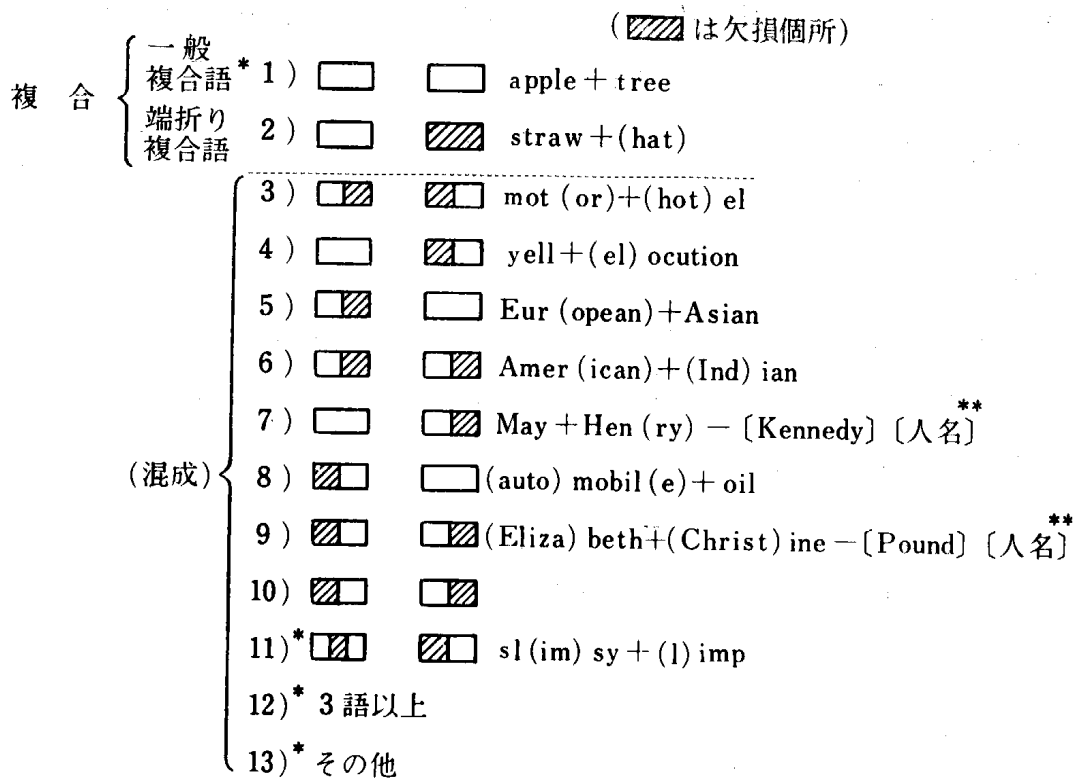


図1 混成語の形態分類

* 筆者の拡張部分

** 上野景福『語形成』の中で, A. G. Kennedy, *Current English*, Louise Pound, *Blends, Their Relations to English Word Formation* より引用している例。

次の表1は、『研究社新英和大辞典』(以下『研英大』⁽⁵⁾)収録語23万語の悉皆調査を行い、図1のパタンに従って分類したものである。

表1 混成語形態別分類表

形態別分類	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
収録数	63	20	12	5	0	0	1	0	2*	2	8

* 化学薬品・製品の大部分は混成語であるが、一般辞書で成分を知ることはむずかしい。参考として1例を示した。

この調査結果は、「混成のうち圧倒的に多いのは3)型で、ついで4), 5), 6), 11)が続く。7), 8), 9), 10)型は殆んどない」⁽⁶⁾と『語形成』で指摘されている点にほぼ一致している。

次に混成形態を型別に検討するが、その前に第1図の2)型端折り複合語 (clipped compound) に触れておくことにする。

最近確立したものとしては、summit が好例である。

summit < summit conference

『研英大』(第5版1980)には、

n. 3 b 頂上会談, 首脳会談: an economic~経済首脳会談,

と説明されている。しかし、『研英大』(第4版1960)には出ていない。Summit は第1回目が1975年にランブイエで開催されたのであるから当然といえる。

以下型別に検討を行う。なお、収録例は附録に別表として纏めてある。

3) 型

63例で、最も一般的といえる。この中に音節子音 (syllabic consonant) をもつものが9例あり注目される。

chackle, draggle, ruffle, spraddle, squiggle, twattle, twiddle, waggle, widdle

他の型の中には、11)型の chortle と13)型の frazzle の2例しかない。

音結合群 (consonant cluster) に片寄りがある点も興味深い。

dl (3), gl (3), fl (1), tl (1), kl (1)

この3)型に女性名 Della と Dorinda があり、他の型にはない。

4), 5), 6), 9) 型には特に目立つ特徴はない。

11) 型

Lewis Carroll が chortle で試みた形態であるが、直接の結合でなく挿入であり、10)型までの語形成と異なっている。

12) 型

3語の例が2つある。この型は特に化学分野で化合物の成分を示す手法として用いられる。従って、化学薬品名を一般辞書でなく、専門辞典で調べればこの種の混成語はかなりの数になるはずである。

ethambutol < eth (ylene) + am (ine) + but (an) ol

(薬学) エタンビュトール (結核菌の発育を抑制する合成薬)

Romeldale ロメルデール (Romney, Rambouillet, Corriedale の3種の羊のかけ合わせによる羊毛用の一品種の羊) これは化学製品ではないが、語形成は類似している。

13) 型

他の型に該当しない8例である。結合のし方、発音、綴りに規則性がなく特殊例である。

twirl, zircaloy, phonestheme, varindor, technetronic, frazzle, stash, chauffer

つぎに、混成語の類似形態である混種語・混淆語・頭字語・略語を検討することにする。

混種語 (hybrid) は、互に異なった言語に由来する2つ以上の要素が結合してできたものである。英語においては、英語そのものが、多種な言語が混ってできた言語であるから、異なった語源をもつ要素の結合にも違和感はない。混種による語形成は、主として派生語に多い。これを形成する接辞は、フランス語、ラテン語、ギリシャ語からの借用である。しかし、完全に同化しているので、語源に関心をもつて見ない限り識別は困難である。

booklet < book + [F] -let

subway < [L] sub- + way

pan-American < [GK] pan- + American

混淆 (contamination) は、2つの類似した語句・構文を無意識的また時として意識的に混淆することによって、新しい語句・構文を生ずることである。

flush < fl (a) sh + (bl) u (sh)

slender < sl (ight), sl (im) + (t) ender

slide < sl (ip) + (gl) ide

語形成に関して、混淆は混成と同じである。ただ、構成要素が類似している、従って無意識に2語を混ぜてしまうことになる。一方、混成は意識的語形成である。

頭字語 (acronym) は、 数個の語から成る名称を、 各語の初頭文字または音節をつなぎ合わせて1語としたものである。

NATO < N(orth) A(tlantic) T(reaty) O(rganization)

radar < ra(dio) d(etecting) a(nd) r(anging)

混成語は構成要素の品詞が同じであることが多いが、頭字語は radar の例に見られるように接続詞まで加えている。混成語と頭字語の大きな相違点は、頭字語は元の構成要素に戻すことができる点である。この可逆性は頭字語の特徴といえる。また頭字語は語形成が自由にできるが、混成語と違って第3の意味の表出がない。

次に、NATO と radar を比較してみると、その語形成の過程に違いがあるように思える。可逆性という点では、NATO の方が高く、radar の方は低い。一方、名詞化という点では、可逆性とは反対に、NATO の方が低く、radar の方が高い。

この原因は、先に述べた語形成の過程にある。Radar には、頭字語として語形成したときすでに元に戻す必要のない普通名詞の特徴を与えていたのである。

NATO は North Atlantic Treaty Organization が正式名であり、省略した形と省略しない形が併存しているのである。一方、radar は元の radio detecting and ranging は名称ではなく、機能の羅列に過ぎない。実は、新しい機器の名前を付けるにあたって、機能を手掛りとして、頭字語の形成手法を用いたのである。

この手法は更に一步進んで、既存の語になぞらえて頭字語を造るようになってきた。特に技術が日進月歩の電子機器関係に多い。

laser < l(ight) a(mplified by) s(timulated) e(mission of) r(adiation)

BASIC < B(eginners) A(ll-purpose) S(ymbolic) I(nstruction) C(ode)

Laser は機能説明の頭字語であるが、BASIC は明らかに既存の basic の意味内容に合せての言葉遊びによる語形成である。

実は、Basic には、Basic English として英国の心理学者 C. K. Ogden が1930年に発表した850語を基本とする一種の国際補助語を意図したものがある。この Basic が頭字語であることに気付く者は少ない。

Basic < B(ritish), A(merican), S(cientific), I(nternational), C(ommercial)

ここで、頭字語と略語 (abbreviation) の違いを検討しておくことにする。頭字語は NATO [néitou], BASIC [béisik] のように、一般の語と同じ固有の語ストレスをもっている。また、Nato, Basic のように書記できるまで一般化することがある。

一方、省略によって造られた略語には、Sun. のように書記上でのみ用いられ、音声上では元の Sunday [sánda] と省略しないで発音されるものと、B. A. [bí:éi], M. A. [éméi] のように略語を文字固有の音で発音されるものがある。

混成語と対立させて検討する対象は、2語以上からなる略語である。

CPU [sí:pi:jú:] < c(entral) p(rocessing) u(nit)

LSI [élèsái] < l(arge-) S(cale) I(ntegration)

S. D. [ésdí:] < s(tandard) d(eviation)

『研英大』では CPU, LSI には他の内容の略語はないが、SD は16種類の略語となっている。2語の略語すなわち2文字では重なるの確率が高いのは当然といえる。

以上混成語・混種語・混濁語・頭字語・略語を検討してきたが、その特徴を表2に示す。

表2 混成語と類似語の特徴分析

複合形態 \ 特徴	要素の類似性	語形成の意図性	複合の自由度	元の語への可逆性	第3の意味の表出	元の語の一部消失	語としての固有の発音
混成語	-	+	-	-	+	+	+
混種語	-	±	-	+	+	±	+
混濁語	+	±	-	-	+	+	+
頭字語	-	+	+	+	-	+	+
略語	-	+	+	+	-	+	-

Ⅲ. ま と め

Lewis Carroll が chortle, snark, galumph を造ったのは、「得意げに歌う、笑いながらしゃべる」、「神秘的な想像上の怪物」、「得々として行く、重々しげに歩く」といった内容表現以上に、戯言化された語としての効果を意図してであろう。この戯言化効果は混成の内面的特徴の1つである。

また、Basic に見られるような既存語に合うように意図的に文字を組み合わせる現象は一種のなぞり現象 (loan translation あるいは calque) である。

この戯言化となぞり現象は、特に最近の造語に見られる。第二次世界大戦後の複雑な世界情勢・高度な技術革新は英語の新語を必要とし、戯言化・なぞりを手段として新しい混成語・頭字語・略語を生み出している。

混成語抽出の段階で、混成語より頭字語の方に新語が多いことに気付いた。

また、混成語・頭字語の音節構成に特徴があるように思えた。これらの点は、今後の研究課題とする。

附録『研究社新英和大辞典』(第5版)収録混成語

3型

birl < b(irr) + (wh)irl
blotch < bl(ot) + (b)otch
brash < br(eak) + (r)ash
celtuce < cel(ery) + (let)tuce
chackle < cha(tter) + (ca)ckle
chump < ch(unk) + (l)ump
cubature < cub(e) + (quadr)ature
cyclamate < cycl(ohexyl) + (sulf)amate
decathlete < deca(thlon) + (a)thlete
Della < Del(ia) + (Bel)la
Dorinda < Dor(othy) + (L)inda
draggie < dra(g) + (da)ggie
flub < fl(op) + (d)ub
galumph < gal(lop) + (tri)umph
glob < gl(obe) + (bl)ob
glop < gl(ue) + (sl)op
guck < g(oo) + (m)uck
heliport < heli(copter) + (air)port
hohum < ho(cus-pocus) + (bun)kum
Japalish < Jap(anese) + (Eng)lish
knurl < knu(r) + (gna)rl
latensification < la(tent) + (in)tensification

Laurasia < Laur(entian) + (Eur)asia
 liger < li(on) + (ti)ger
 Maximilian < Maxi(mus) + (Ae)miliaus
 mog < m(ove) + (j)og
 negatron < nega(tive) + (elec)tron
 pendeloque < pend(ent) + (br)eloque
 pentathlete < penta(thlon) + (a)thlete
 phalanstery < phala(nx) + (mona)stery
 positron < posi(tive) + (elec)tron
 racon < ra(dar) + (bea)con
 randem < ran(dom) + (tan)dem
 riffle < ri(pple) + (ru)ffle
 rollick < ro(mp) + (fro)lic
 scamp < sca(nt) + (ski)mp
 scrip < scri(pt) + (scra)p
 seep < s(ea) + (j)eep
 selsyn < sel(f) + syn(chronous)
 shambolic < sham(bles) + (sym)bolic
 slash < sl(ush) + (pl)ash
 slimsy < sl(im) + (fl)imsy
 slurbs < sl(um) + (sub)urb
 smaze < sm(oke) + (h)aze
 smog < sm(oke) + (f)og
 snark < sn(ake) + (sh)ark
 snazzy < sn(appy) + (j)azzy
 Spanglish < Span(ish) + (En)glish
 spraddle < spr(ead) + (str)addle
 sprog < spro(cket) + (co)g
 squeg < squ(eeze) + (p)eg
 squiggle < squ(irm) + (wri)ggle
 squinch < squin(t) + (pin)ch
 strum < str(ing) + (thr)um
 transistor < tran(sfer) + (re)sistor
 tricolette < trico(t) + (flanne)lette
 troglobite < troglob(iont) + (troglod)yte
 tangelo < tang(erine) + (pom)elo

tarnation < tarn(al) + (damn)ation
tigon < ti(ger) + (li)on
twattle < tw(iddle) + (t)attle
twiddle < tw(irl) + (f)iddle
wangle < wan(kle) + (wag)gle
widdle < wee(-wee) + (pid)dle

4 型



airplane < air + (aero)plane
beverage < beer + (peer)age
boatel < boat + (hot)el
boatique < boat + (bout)ique
bowgrace < bow + (bon)grace
clarionet < clarion + (clarin)et
flaperon < flap + (ail)eron
frontlash < front + (back)lash
headphone < head + (tele)phone
helicon < helico + (bombard)on
jigaboo < jig + (bug)aboo
Marsokhod < Mars + (Lun)okhod
motel < mo(tor) + (ho)tel
multiversity < multi + (uni)versity
outsert < out + (in)sert
plugola < plug + (pay)ola
radiocast < radio + (broad)cast
radiograph < radio + (tele)graph
sandwicheria < sandwich + (cafet)eria
tropicopolitan < tropic + (cosm)opolitan

5 型



bee-liner < bee(line) + liner
cowpoke < cow(puncher) + poke
crunode < cru(x) + node
helibus < heli(copter) + bus
medicare < medi(cal) + care

operon < oper(ator) + on
parametron < parame(ter) + tron
twilight < twi(light) + night
rurban < r(ural) + urban
transitron < transi(tion) + tron
ubiquinone < ubi(que) + quinone
zebrass < zebr(a) + ass

6型



comsymp < com(munist) + symp(athizer)
cultvar < culti(vated) + var(iety)
cyborg < cyb(ernet)ic + org(anism)
DORAN < Do(ppler) + ran(ge)
FORTRAN < for(mula) + tran(slation)

9型



gyrocopter < (auto)gyro + (heli)copter

11型



slimpsy < sl(im)sy + (l)imp
chortle < ch(uck)le + (sn)ort

12型 (3語以上)

ethambutol < eth(ylene) + am(ine) + but(an)ol (化学薬品の例として挙げた)
Romeldale < Rom(ney) + (Ramboui)l(let) + (Corrie)dale

13型 (その他)

twirl < t(rill) + w(h)irl
zircaloy < zirc(onium) + al(l)oy
phonestheme < phoneme + (a)esth(etic)
varindor < var(iable) + ind(uct)or
technetronic < techn(ological) + e(lec)tronic
frazzle < fra(y) + (fa)sle
stash < st(ore) + (c)ache
chauffer < ch(afer) + (ch)auffer

注(1) 新村出『広辞苑』第2版(岩波書店, 1969) p. 706.

(2) 上野景福『語形成』 p. 1 (Henry Sweet の定義を引用 'A word may be defined as an *ultimate independent sense-unit*' *A New English Grammar: Logical and Historical* (Oxford, 1981) p. 20.)

(3) *Ibid.*, p. 40. (Harold Wentworth, *Blend Words in English* (Ithaca, 1933) に Wyclif から James Joyce に至る間の混成語を3600挙げてあるそうである, と Sheard, *The Words We Use* からの引用の注がある。)

(4) *Ibid.*, p. 39.

(5) 小稲義男他編『研究社英和大辞典』第5版(研究社, 1980)(第5版は, 見出し語の語源欄に異化・異分析...混成...頭字語...の表示がある。今回の調査の手掛りとなり便利であったが, ラベルの付け落し, 判断の矛盾も目立った。)

(6) 上野景福, p. 39.

参考資料

1. 市河三喜編『研究社英語学辞典』(研究社, 1952)。
2. 上野景福『語形成』英文法シリーズ25(研究社, 1956)。
3. 国語学会編『国語学辞典』(東京堂, 1973)。
4. 橋本貞雄「Portmanteau (かばん語)」『工業英語』(インタプレス, 1976年5月) pp. 82-83.